

英国パブリック・スクール研究に見られる研究動向（Ⅱ）

—『トム・ブラウンの学校生活（1857）』に対する評価を中心に—

鈴木 秀 人

(1994年10月17日 受理)

The Trend of Studies on the English Public Schools (Ⅱ)

—On the Estimation of “Tom Brown’s Schooldays (1857)”—

Hideto Suzuki

I. はじめに

1834年から41年まで、英国パブリック・スクールの一つであるラグビー校に学んだトマス・ヒューズ (Thomas Hughes) が、同校における自身の体験を下敷きにして書き著したスクール小説『トム・ブラウンの学校生活 (TOM BROWN'S SCHOOLDAYS)』¹⁾は、1857年4月に初版が出版された。この小説は大変な人気を博し、その年の11月には早くも5版が刷られ、1890年までには50版近くを重ねることになるが、その間にはフランスやドイツでも翻訳出版されるなど、当時としては記録的なベスト・セラーとなった。²⁾そしてこの作品の中でヒューズが、様々なスポーツに熱心に取り組む少年達の姿を繰り返し描いたことによって、この小説は、彼がラグビー校在学時に校長であったトマス・アーノルド (Thomas Arnold) を、スポーツに初めて教育的価値を見出して積極的に奨励した“スポーツ教育の祖”として神格化する上で大きな役割を果たすこととなったのである。

しかしながら、英国における体育・スポーツ史の本格的な研究が始まった1950年代以降、それまで広く語られてきた“スポーツ教育の祖”というアーノルド像は一貫して否定される方向で研究が積み重ねられてきている。³⁾そこでは、アーノルドを“スポーツ教育の祖”とする上で絶対的な根拠とされてきた『トム・ブラウンの学校生活』は、アーノルドの真実の姿を伝えていないものとされ、アーノルドを知る資料としての同書に対する評価は相当に低下したのであった。

本研究の目的は、このような1950年代以降に展開されてきた英国パブリック・スクール研究に見られる研究の動向を、代表的なパブリック・スクール研究者達が、アーノルドを知る資料としての『トム・ブラウンの学校生活』に対して下した評価に絞って整理することにある。これは、アーノルドを知る資料としては、もはや『トム・ブラウンの学校生活』は評価することができないとするそこでの諸見解に対して、新たな視角から異議を申し立てようとする今後の検討の準備段階として

位置づけられるものである。

II. 先行研究に見られる『トム・ブラウンの学校生活』に対する評価

(1) P. C. マッキントッシュの見解

1952年にマッキントッシュが発表した“PHYSICAL EDUCATION IN ENGLAND SINCE 1800”⁴⁾は、体系だてられたものとしては初めての英国体育史研究と言える。⁵⁾ この中で、マッキントッシュはそれまで語られてきた“スポーツ教育の祖”というアーノルド像の否定を開始したのである。

マッキントッシュは、スポーツを抑圧或いはせいぜい黙認していたパブリック・スクールの教師達の態度が、1860年代までには積極的な奨励へと変化していったことを述べた上で、「この変化はしばしばアーノルドに負うものとされてきたが、あまりに多くを彼の功績によるものとし過ぎたのではないかと、従来からの定説に疑問を投げかけたのである。⁶⁾ そして、「アーノルドがクリケットやフットボールを、その教育的価値を認めて、直接・意識的に奨励したという証拠は乏しい」⁷⁾ ことを指摘し、ラグビー校におけるスポーツ活動は、アーノルドが教育的価値を見出して奨励したと言うよりも、「校内の規律を維持し、自分の意図した改革を達成する上で、生徒達の協力を得る為に支払った代償 (the price) なのである」という説を提示した。⁸⁾

かかる立場に立つ以上、長い間アーノルドを“スポーツ教育の祖”とする根拠とされてきた『トム・ブラウンの学校生活』について、マッキントッシュはそれまでとは異なる解釈をとることになる。1957年に発表した“LANDMARKS IN THE HISTORY OF PHYSICAL EDUCATION”⁹⁾においてマッキントッシュは、『トム・ブラウンの学校生活』について次のように述べている。「この小説はアーノルドの死後15年を経た後に書かれたものであり、その影響力はまだ消滅していなかったに違いないとはいえ、ラグビー校における生活の描写としても、またアーノルドのゲームに対する態度を示す証拠としても、かなりの限定付きで取り扱わなければならない。」¹⁰⁾ この『トム・ブラウンの学校生活』に対するマッキントッシュの見方は、1968年発表の“SPORT IN SOCIETY”¹¹⁾の中でより明確な形で表現されることになる。マッキントッシュは、「組織的ゲーム礼賛の始まりは、しばしばアーノルドの功績によるものとされてきたのだが、それはトマス・ヒューズの小説『トム・ブラウンの学校生活』が犯した過ちである」¹²⁾と断言したのである。

マッキントッシュはラグビー校におけるスポーツの興隆を、アーノルドが支払った代償にすぎなかったと結論し、アーノルドを“スポーツ教育の祖”という神格化された地位から引きずり降ろす作業に言わば先鞭をつけた。そこでは、“スポーツ教育の祖”としてアーノルドを語る根拠とされてきた『トム・ブラウンの学校生活』の解釈も、当然のことながら否定されたのであった。

（2）B. T. P. ムティマーの見解

ムティマーは、19世紀後半の英国パブリック・スクールに見られた特徴のひとつである組織的ゲーム興隆のスターティング・ポイントを、ラグビー校校長のアーノルドが提供したかどうかについて検討し、1971年に“ARNOLD AND ORGANISED GAMES IN THE ENGLISH PUBLIC SCHOOLS OF THE NINETEENTH CENTURY”¹³⁾と題した博士論文にまとめている。この研究の中でムティマーが導き出した結論は、「19世紀後半を通して隆盛を見た組織的ゲームの強調と運動競技の礼賛は、誰か一人の人物が生み出したり、コントロールしうる範囲を越えた社会的な力の結果である」¹⁴⁾というものであり、言うまでもなくそこでは、“スポーツ教育の祖”というアーノルド像は完全に否定される。

ムティマーは、「証拠が全くないことより、19世紀後半に見られたようなゲームの積極的な奨励をアーノルドは行わなかった、と言うことは可能である」とし、「後に考えられたような、性格形成を目的としてゲームを奨励するということを、彼は決して行わなかったし、行うことを考えてもいなかったことは確実である」と指摘する。¹⁵⁾ ムティマーは、アーノルドがゲームと直接関連する何かをしたというよりも、ラグビー校を改革したアーノルドの仕事が、その後の組織的ゲーム興隆とその結果として生じる運動競技礼賛の為の舞台をお膳立てした、と見るのである。¹⁴⁾ 「ゲームが発展していく助けとなるような学校の気風を、アーノルドは創り出したのであった」とムティマーは指摘する。¹⁵⁾ これは、“LANDMARKS IN THE HISTORY OF PHYSICAL EDUCATION”の中でマッキントッシュが示した、ゲームやスポーツは少年達による自治の最も完全な世界であった為に、学校の統治をめぐるプリフェクト・システムを強化したアーノルドの改革から、アスレティシズムは予期せぬ刺激を受けたとする見解¹⁶⁾とほぼ共通するものと言えるであろう。

それではムティマーは、『トム・ブラウンの学校生活』に対してどのような評価を下しているのだろうか。先ずムティマーは、「現在まで残されているアーノルド時代の学校生活についての多くの記述や個人の手紙などが、いじめやゲーム活動、その他のヒューズが描いた描写を裏付けている」とし、「ヒューズの学校についての記述、特にそのスポーツをめぐる生活についての記述は、正確なものとして受け取ることができる」とする。¹⁷⁾ しかしながら同書は、アーノルドのスポーツについての考え方も正しく伝えているとはムティマーは見えていないのである。『トム・ブラウンの学校生活』は、「アーノルドの名を広く世に知らしめただけでなく、アーノルドはゲームの主唱者であったという信仰を生み出すことになった」とムティマーは言う。¹⁸⁾ ヒューズが『トム・ブラウンの学校生活』を出版する前から、ラグビー校式フットボールが広まる中で、フットボールとアーノルドが結びつけられていくことは見られたのだが、同書はこの結びつきを強固なものにした¹⁹⁾、とムティマーは指摘するのであった。

このようにムティマーは、『トム・ブラウンの学校生活』は当時のラグビー校における少年達の生活をかなり正確に伝えるものであるとはしながらも、それを“スポーツ教育の祖”としてのアーノルドの姿を伝えるものとして認めることはなかったのである。

(3) 阿部生雄の見解

阿部は、1978年発表の「イギリス中等教育におけるスポーツ教育の成立—トーマス・アーノルドのスポーツ教育論を中心にして—」²⁰⁾及び翌79年発表の「スポーツ教育とチームスピリット—アーノルド」²¹⁾という二つの論文によって、アーノルドについて詳しく論じている。その中で阿部は、マッキントッシュに始まる“スポーツ教育の祖”としてのアーノルドを否定した1950年代以降の「見解を了承」²²⁾し、神格化されてきたアーノルド像をもはや受け入れることはなかった。

その上で阿部は、アーノルドがスポーツやその他の身体活動に関心を示していたことを、いくつかの資料の分析から明らかにする。そして阿部は、「アーノルドは、明らかに遊びや運動がもたらす気分転換の機能を教育の場で重視していた」²³⁾とし、アーノルドが「組織的ゲームを教育の重要な部分と考えていたことは事実のようである」²⁴⁾と見るのである。ただし阿部は、アーノルドは運動場の英雄を優遇することはなく、彼が重視したのは知的、道徳的卓越であって、競技者の卓越した肉体ではなかったことを明確に指摘する。²⁴⁾そして阿部は、「アーノルドがパブリック・スクールの鍛練法として重視したプリーフェクトーファギング制度は、クラブ活動の生徒による組織化、合議制、共同負担というゲーム・スポーツの自治的運営を導いたといえる」²⁵⁾とし、結果的にアーノルドの「遂行したラグビー校改革が、アスレティシズムの方向を限定し、ゲーム・スポーツの教育的運営を可能にした、ということは十分に考えられることである」²⁶⁾と結論づけた。

さて、『トム・ブラウンの学校生活』に対する評価であるが、阿部は先ずこの小説が“スポーツ教育の祖”としてアーノルドを神格化する上で大きな役割を果たしたことを次のように説明している。アーノルドは、「『トム・ブラウンの学校生活』の助力を得て、偉大な校長、アスレティシズムの礼賛者として神格化の一步を辿りはじめた。」²⁷⁾更に阿部は、「アーノルドを体育の領域で高く引きあげたのは、『トム・ブラウン』の愛読者、クーベルタンであった」ことも明確に指摘している。²⁸⁾しかしながら阿部はこの小説を、アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料としては評価していない。そうではなく、『トム・ブラウンの学校生活』の中に見られる「団体精神 (esprit de corps) とチーム・スピリットとも呼ばれる協力の精神は、キリスト教社会主義者の“協同”の理念と無縁ではなかった」と阿部は言う。²⁹⁾そして、キリスト教社会主義運動に参加していたヒューズは、「こうした協同の思想を、学校小説というジャンルで宣伝した人であった」³⁰⁾と阿部は位置づけるのであった。加えて、キングスリイやヒューズによって先導され、キリスト教社会主義運動の中から生まれた“筋肉的キリスト教 (Muscular Christianity)”と呼ばれる思想における「協同」と“マンリネス”の主張は、アーノルドのラグビー校改革の継承的側面をもつものであると見る阿部は、「『トム・ブラウン』のテーマは、アーノルドのラグビー校改革と切り離せないものであった」と解釈するのである。³¹⁾

即ち阿部は、『トム・ブラウンの学校生活』という小説を、ヒューズが参加していたキリスト教社会主義運動、そして“筋肉的キリスト教”の思想を表現しているものとして捉えるのであり、その思想そのものの中に、アーノルドがラグビー校を改革する中で追求したクリスチャン・マンリネ

スと共通する主張を読み取ることができる、とするのであった。

（4） J. A. マンガンの見解

マンガンは、1981年に発表した“ATHLETICISM IN THE VICTORIAN AND EDWARDIAN PUBLIC SCHOOL”³²⁾において、19世紀後半のパブリック・スクール各校を席卷した、スポーツを盲目的に崇拜する“アスレティズム (Athleticism)”と呼ばれる教育的イデオロギーの発生とその広がりについて考察しているが、その中でも“スポーツ教育の祖”としてのアーノルド像は否定されている。

マンガンは、「アーノルドは後のパブリック・スクールの教師達が明確に見出し、そして確信を持って説いた、クリケットやフットボールが持つモラルを改善する可能性を理解してはいなかった」と指摘する。³³⁾そして、アーノルドの弟子であり、アーノルド精神の最も強力な後継者の一人と目されるマルバラ校校長のコットンがスポーツを行かせた目的も、少年達をできるだけ校内の、しかもプレイ・グラウンド内に一緒にいさせることにあり、組織的ゲームはその為の手段と見なされていたにすぎないとマンガンは述べるのである。³⁴⁾このようにマンガンは、パブリック・スクールにおけるスポーツ興隆の起源をアーノルドには求めていない。マンガンの導き出した結論は、「アスレティズムの起源の一つは、社会統制の手段 (a form of social control) としてゲームが利用されたところにある」³⁵⁾というものである。これは、マッキントッシュの見解を基本的には踏襲したとも言えるが、マッキントッシュの言う校内の改革を達成する為に支払われた“代償”という概念を、“社会統制”という言葉に置き換え、しかもその明確な姿をアーノルドではなく、それ以後のハロー校のヴォーン、マルバラ校のコットン、アッピングラム校のスリングらに見出した点にマンガンの見解の特徴がある。

そしてマンガンは、『トム・ブラウンの学校生活』の中に一人の青年教師として登場するコットンは、その場面において「ゲームの効用として協力、利己的にならない精神、望ましい気質などが育つことを説いているが、彼がマルバラ校にゲームを導入した主たる理由は、1852年に校長に就任した際に直面した、密猟や不法侵入、その他の無法活動といった、校内の規律を維持していく上で解決していかなければならなかった問題の中に見出される」³⁶⁾と指摘する。つまりここでマンガンは、『トム・ブラウンの学校生活』に描かれているコットンのスポーツに対する考え方は、真実のものではないと考えているのである。従って当然のことながら、『トム・ブラウンの学校生活』は、コットンの師であるアーノルドのスポーツについての考え方を知る資料としても評価されることはないと思われる。

マンガンにとって、パブリック・スクールにおけるスポーツ興隆の起源は、教師の生徒達に対する“社会統制”に求められるのであり、『トム・ブラウンの学校生活』は、この時期のそういった教師達の姿を正しく伝えているものとは見なされないのであった。

(5) T. J. L. チャンドラーの見解

チャンドラーは、1984年に提出した博士論文“ORIGINS OF ATHLETICISM GAMES IN THE ENGLISH PUBLIC SCHOOLS, 1800-1880”³⁷⁾において、パブリック・スクールでのスポーツ興隆を導いたメカニズムを明らかにしようとした。特にチャンドラーはマンガンが提示した“社会統制”説は、スポーツが興隆していく過程での校長が果たした役割を強調しているが、それでは説明できない学校も存在することを指摘する。³⁸⁾そして“社会統制”説では不十分な点を、生徒や卒業生、校長以外の教師達が果たした役割に注目して、プレイ的活動を組織的ゲームに発展させたメカニズムとしての教師と生徒の“相互適応 (mutual adaptation)”という概念³⁹⁾によって説明しようとしたのであった。

このようにスポーツの興隆において、生徒や卒業生、校長以外の教師達が果たした役割にチャンドラーが注目する以上、そこでは当然の帰結として、“スポーツ教育の祖”としてのアーノルド像は否定されることになる。これまでのパブリック・スクールの歴史研究者達は「ある特定の学校からゲームが広まったという証拠を探し続けてきて、近年に至るまで、多くの研究者達はラグビー校のアーノルドこそがその起源であると信じていた」とチャンドラーは言う。⁴⁰⁾しかし、「アーノルドの著述の中には、ゲームのモラル的な価値について詳しく述べたようなところはない」⁴¹⁾という事実をチャンドラーも見逃すことはなかった。パブリック・スクールにおけるスポーツ興隆の起源を、教師側からの一方向的な働きかけである“社会統制”に求めた「マンガンの見解の不足を補う」³⁹⁾形で、チャンドラーは、卒業生も含めた生徒と校長以外の教師達が果たした役割を重視し、教師と生徒相互の働きかけを通して、スポーツはパブリック・スクールの中で発展していく場所を確保しえた結論するのであった。⁴²⁾

この論文の中でチャンドラーは、『トム・ブラウンの学校生活』については特に詳しく述べていない。しかしながら、『トム・ブラウンの学校生活』の作者ヒューズは、ゲーム・スポーツに教育的な価値を見出していたこと⁴³⁾、そういった考え方が他のパブリック・スクールにもヒューズによって広められていたこと⁴⁴⁾をチャンドラーは指摘している。かかる指摘と、先に見たアーノルドをめぐるチャンドラーの見解を併せて考えてみるならば、彼の『トム・ブラウンの学校生活』に対する見方は自ずと明らかになってくるように思われる。即ちチャンドラーは、ゲーム・スポーツの教育的価値を説く『トム・ブラウンの学校生活』を、作者ヒューズのスポーツをめぐる考え方を伝えるものとして見ている、と考えられるのである。

従って『トム・ブラウンの学校生活』という小説は、チャンドラーにとって、ヒューズの思想が表現されたものとして評価されることはあっても、アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料として位置づけられることはありえないのである。

(6) M. トーザーの見解

パブリック・スクール研究のオーソリティの一人であるトーザーは、スポーツ教育の成立過程に

においてアッピンガム校校長のスリングが果たした役割に注目し研究を積み重ねてきた⁴⁵⁾が、1989年に発表した“THOMAS HUGHES: ‘TOM BROWN’ VERSUS ‘TRUE MANLINESS’”⁴⁶⁾と題した論文において、『トム・ブラウンの学校生活』の作者ヒューズの思想体系の考察に取り組んだ。

先ずトーザーが指摘するのは、ヒューズはアーノルドを取り巻いていた優秀な生徒達の集まりの中に入ることは全くなかったという事実である。⁴⁷⁾ トーザーは、ラグビー校の優等生でアーノルドから直接薫陶を受け、後にアーノルドの思想を広く世に伝えることに成功するアーノルド伝“THE LIFE AND CORRESPONDENCE OF THOMAS ARNOLD, D. D.”⁴⁸⁾をまとめたスタンリィとヒューズを対比させている。つまり、常にアーノルドの近くにおいて直接教えを受けたスタンリィとは異なり、ヒューズはアーノルドの内面を十分に知ることができる立場にはいなかったことをトーザーは強調する。⁴⁷⁾ むしろヒューズの思想は、アーノルドよりもキリスト教社会主義者であったキングスリィから影響を受けたものである、とトーザーは言う。⁴⁹⁾ 更に、トマス・ヒューズとトム・ブラウンという「二人のトムは、アスレティシズム興隆の狂想曲を奏でた」が、トム・ブラウンは、ヒューズらによってキリスト教社会主義運動の中で追求されたマンリネスのイデアールからも勝手に一人歩きを始めてしまった⁴⁷⁾、とトーザーは解釈する。

トーザーは、アーノルドを“スポーツ教育の祖”とする根拠とされてきた『トム・ブラウンの学校生活』はアーノルドの思想を正確に反映するものではないこと、そして作者ヒューズの意図したイデアールからも歪められた方向で解釈されてしまったことを指摘している。当然そこでは、『トム・ブラウンの学校生活』を一つの拠り所としてきた“スポーツ教育の祖”というアーノルド像は否定されるべきものとして扱われており、トーザーの研究において、アーノルドに率いられたラグビー校に、スポーツ教育の起源という地位が与えられることはないのである。

このように、『トム・ブラウンの学校生活』はアーノルドの思想を正しく伝えるものとは考えることができないとされる以上、アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料として、この小説をトーザーが評価することはないのであった。

Ⅲ. 先行研究の総括

これまで見てきたように、本研究において取り上げた6人の代表的なパブリック・スクール研究者達の先行研究では、かつて広く語られていた、スポーツに初めて教育的価値を見出して積極的に奨励した“スポーツ教育の祖”というアーノルド像は一貫して否定されている。アーノルドとスポーツを直接的に結びつけてきたそれまでの定説をこれらの研究者達が否定する理由は、主として以下の3点に集約することができるだろう。第1に、アーノルド自身がスポーツの持つ教育的価値について直接・明確に語った証拠がなく、アーノルドがスポーツを教育の内容として積極的に奨励していたとは考えられないこと。第2に、アーノルドは生徒を統制する手段としてスポーツを利用したにすぎず、その運営方法が結果的にラグビー校におけるスポーツの興隆をもたらした可能性はあっ

